

# シンポジウム：パラリンピックを楽しむ

鈴木淳也

玉川学園・玉川大学  
健康・スポーツ科学研究紀要  
第20号

## 「スポーツと教育 2019」

### シンポジウム：パラリンピックの楽しみ方

玉川大学教育学部健康教育研究センター主催

令和2年1月18日(土) 13:00~16:00

場所：UCH106 教室

#### <シンポジウム講師>

●藤田 紀昭

日本福祉大学教授

(公財)日本障がい者スポーツ協会技術委員会副  
委員長、(一社)日本ボッチャ協会理事

●曾根 裕二

大阪体育大学教育学部 准教授

一般社団法人日本ボッチャ協会強化コーチ

●高桑 早生

所属：NTT 東日本

2012年ロンドンパラリンピック

100m7位入賞、200m7位入賞

2016年リオデジャネイロパラリンピック

100m8位入賞、200m7位入賞、走幅跳5位入賞



これまで玉川大学教育学部健康教育研究センターでは、「スポーツと教育」をテーマとし、シンポジウムとワークショップを実施してきました。今年度は、2020年東京オリンピック、パラリンピック開催年として、パラリンピックの研究者ならびに選手、指導者にお越しいただき、「パラリンピックの楽しみ方」をテーマに、シンポジウムを開催しました。

はじめに、研究者の立場として、日本福祉大学教授の藤田紀昭先生より、パラリンピックの歴史や競技種目について、紹介がありました。パラリンピックは、以前よりもメディアに取り上げられる回数が増えましたが、体育専攻の学生も初めて知る種目もあったようで、選手のプレーを実際に映像でみて、驚く学生も多くみられました。各競技の特性やルールなど、パラリンピックの基本的な知識を学べる貴重な時間となりました。

次に、指導者の立場として、大阪体育大学の曾根裕二先生より、障がい者スポーツ独自の種目であるボッチャの魅力について、話していただきました。ボッチャは、白いジャックボールに、赤や青のカラーボールを6球投げ、相手のボールより自分のボールがジャックボールに近い方が勝ちとなる種目です。重度脳性麻痺や四肢重度障害といった比較的障がい较重い人でも出場できる種目で、投げる技術もさることながら、カーリングのようにチーム戦術が勝敗を左右する競技でした。



そして、選手の立場として、NTT 東日本所属、陸上パラリンピック現役選手の高桑早生選手より、陸上パラリンピックの競技種目や競技を始めるきっかけについて話していただきました。高桑選手は、中学の時に、骨肉腫で左下腿を切断し義足となり、高校から本格的に陸上競技を始めました。その後、2012年ロンドンパラリンピック、2016年リオデジャネイロパラリンピックに出場し活躍されましたが、それまでの日常生活、競技での苦労や陸上パラリンピックの想いなど、学生へ語りかけてくれました。

最後に、藤田先生、曾根先生、高桑選手の3名で、「パラリンピックの楽しみ方」として、試合会場での観戦ポイントや注目する選手や種目について、ディスカッションしていただきました。特に、「障がい者スポーツ独自の種目であるゴールボール、ボッチャに注目してほしい。」「障がい者が重いクラスの人のパフォーマンスをみてほしい。」「馬術のパフォーマンスは、圧巻です。」など、パラリンピックについての話は尽きませんでした。



今回のシンポジウムでは、体育専攻の学生中心に107名が参加しました。これから、教員を目指す学生が多く、今回学んだパラリンピックの魅力を、教育現場に出た際に、児童、生徒へ伝えてほしいです。また、参加者には、2020年の東京パラリンピックが終わってからも、障がい者スポーツを支えながら、誰もが当たり前前に多様性を認め合える社会が実現するために、今後どのように取り組んでいくか、考えるきっかけにしてほしいです。(文責：鈴木淳也)